

「*kando*の心理学」を世界に発信

## 欧米研究との比較から「感動とは何か」にアプローチ

一橋大学森有礼高等教育国際流動化機構の安田晶子講師、立命館大学スポーツ健康科学部の正田悠助教、金沢大学人間社会研究域の上宮愛講師、立命館大学スポーツ健康科学部の伊坂忠夫教授らの研究チームは、ヤマハ発動機株式会社との共同研究「感動(KANDO)を科学する」において、これまで日本で行われてきた感動研究を概観し、欧米の類似概念と比較するレビュー論文を発表しました。欧米圏では、感動に対応するような概念として、being moved(心が動かされた)などの動詞の受動態で表されるものや、awe(たとえば、荘厳な景色から強大な力を感じるときの感情)など、より対象を絞ったものが調べられてきました。近年、人やモノなどの事柄に対して強い結びつきを感じたときに生じる社会的感情として*kama muta*(カーマ・ムタ)という概念も提案されています。しかし、これらの概念が、わたしたち日本語母語話者が「感動」と呼ぶ概念と一致するものなのかは、これまで曖昧にされたままでした。本論文では、「感動」が、欧米で使われている類似のことば以上に広い意味を包含している可能性を示しました。本研究成果は、英科学雑誌「Frontiers in Psychology」のポジティブ心理学部門に掲載されました。

## ＜論文情報＞

論文名 : A Review of Psychological Research on *Kando* as an Inclusive Concept of Moving Experiences

著者 : Shoko Yasuda, Haruka Shoda, Ai Uemiya, Tadao Isaka

発表雑誌 : Frontiers in Psychology (Positive Psychology Section)

DOI : 10.3389/fpsyg.2022.974220

URL : <https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/fpsyg.2022.974220/>

## 本件のポイント

- 「感動」をあえて英訳せず *kando* と表現し、日本国内で行われてきた感動研究を概観(レビュー)しました。国内外の読者に向けて、アジア的概念である感動について、心理学的研究をまとめました。
- 従来欧米でなされてきた類似概念の多くは、人との結びつきに関するものが多くを占めていましたが、本研究では音楽聴取など、必ずしも強いストーリー性を持たない対象についての感動も紹介しました。
- 今後の研究動向として、感動が生起するメカニズムと同時に、感動によって引き起こされる人の機能にも注目する必要があることを示しました。

## ＜研究者のコメント＞

安田 晶子(一橋大学森有礼高等教育国際流動化機構)

日本語を母語とする我々は、「感動」という一語で、そのときの心理状態を理解し共有することができます。「感動」に近い概念は欧米諸国にもありますが、そのどれもが日本語で言うところの「感動」と完全に一致するわけではありません。この機会に、日本やアジアの国々では広く一般に親しまれている「*kando*」の概念を海外に伝え、「*kansei*」や「*kawaii*」と同じように、世界中で理解が深まればうれしく思います。